実践報告

家庭科教育における食育指導の地域連携実践
── 家庭と地域及び保幼小連携による「自己有用感」を育む取り組み ──

森　川　美　保
日本福祉大学　非常勤講師

A Practice of Cooperation with Local Institutions for Home Economics Education –A Cooperation with Nursery Schools, Kindergartens, and Elementary Schools for Dietary Education.–

Miho MORIKAWA
Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University

Keywords：家庭科教育，食育，地域連携，自己有用感

要旨

平成 29 年告示学習指導要領では，小学校での家庭科教育の実施は 5 年生からである．それに先立ち，本報告は，おおよそ同じ対象児に対して，5 歳児または 6 歳児の年長児時点と，11 歳児または 12 歳児の小学校 6 年生時点に，家庭科教育の基礎となる教育内容，特に食育について指導した実践について記している．

実践報告 1 では，9 か月に渡り，年長児が，子ヤギを連れて，子ヤギと一緒に大豆を育てることによって，他者への想いやりや，自己有用感を育む過程を丁寧に積み重ね，その姿を保護者の協力のもと，一人一人のアルバムにして記録に残したものである．これは，家庭科教育のレディネス形成に寄与すると考える．

実践報告 2 では，小学校 6 年生時期に 6 か月に渡り，大豆と小麦を麹にしたしょう油麹から，もろみを仕込み，しょう油を絞り，そのしょう油を使って調理した実践や，保護者へ感謝の会の際，一緒に食事を楽しんだあと，家庭に持ち帰るまでの実践を報告した．これは，家庭科教育の食育の指導である．

ふたつの実践で共通するねらいは「食に関する取り組みを通して，子どもが『自己有用感』を実感する経験を積み重ねること」である．本報告の意義は，学校教育の中だけの家庭科教育にとどまらず，保育所，地域，家庭，そして小学校に関わる多様な方々との地道な連携にある．このような取り組みによって，子どもは，知識だけの家庭科教育の学びではなく，自分たちの生活様式を生活文化や習慣として主体的に変えていく，生活に根づいた家庭科教育の学びを獲得していくと考えられる．

1．はじめに

(1) 実践のねらい

学校教育における家庭科の授業は，小学 5 年生から始まるが，一人一人の子どもにとっては，家庭科の基礎となる家庭教育による衣食住の営みが，出生後からすでに家庭の暮らしの中で，様々に工夫されながらはじまっ

ている．子どもは，家族の一員として役割を与えられ，それを日々習慣として繰り返すことで家庭生活を潤滑に送ることができることを知る．その結果，家族に認められ，互いに労い合いながら生活することの大切さを，経験と共に学んでいく．

このような意識が地域全体の家庭の中で広がっていくことが，家庭教育を基礎に，保育所における保育所保育指針や，小学校における学習指導要領の学びを，より豊かにすると考える．

また，衣食住の中でも特に「食」は，唯一人間の身体そのものを構成するものである．日々の積み重ねが，生涯に渡って，子どもたちの豊な人間性を育み，生きる力を身に付けていく習慣となるものである．

「食育基本法」は食育を「生きる上での基本であって，知育，徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けられるとともに，様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し，健全な食生活を実践することができる人間を育てるものとして推進することが求められている」[1] としている．その具体的な方法として，農林漁業者の指導のもと，多くの生産プロセスを体験する活動で，食育で求められる効果が発揮されるとされる「教育ファーム」がある．「教育ファーム」とは，フランス在住の研究者である大島順子氏と日本の教育関係者が作った用語である[2]．筆者は，農林水産省の協力団体のひとつとして連携，実践を積み重ねてきた．本実践報告では，食育が徳育の基礎となるという観点から「食に関する取り組みの中のひとつとして，家庭科教育における地域連携実践により，子どもが『自己有用感』を実感する経験を積み重ねること」をねらいとする．

具体的には，幼児期，学童期において，おおよそ同じ子どもを対象として，地域が連携して活動を実践した取り組みをまとめた．

家庭科教育が始まるのは小学5年生からであるが，未就学の年齢から，家庭科教育につながる取り組みを実践することで，知識だけではなく，生活に根付いた生活文化や生活様式として，子どもが食に対する態度を身につけることを期待している．

(2) 先行研究

宮崎倉太郎（2018）は，「子どもがお手伝いをしたら，子どもが一言日記を書き，家族からも一言もらうようにした．この『家族からの一言』が子どもたちの心に残り，日々のお手伝いを続けるエネルギーになった」と述べている[3]．また，「思いを寄せる相手の気持ちを知ることで，子どもたちは，喜びを感じ，もっとがんばりたいと思うようになる．」とも述べている．現実では，保護者の養護を受け，衣食住を保障され，その生命を心身共に健やかに継続している幼い年齢の子どもであっても，自己有用感を積み重ねることが，社会性の基礎を形つくると考えられる．例えば，離婚して泣いている母親の元へ，1歳児がティッシュを持ってヨタヨタと近寄り，その涙を拭いてくれて心が救われたとの話も聞く．どんなに幼くても，子どもである前に，一人の人間として認め，尊重して関わることの大切さを教えてくれる一例である．

3歳くらいになると，誰に教えられたわけでもなく，「お手伝いする」と主張する子どもの姿を見ることがある．それは微笑ましく感じつつも，かえって手間が掛かるという理由で申し出を断らざるを得ない場面もあり，保護者の悩みどころとも言える．だが，その思いを踏みにじることなく多少の手間や後始末に時間がかることを承知で子どもに「お手伝い」をしてもらうことは，親の役に立てたという喜びを感じ，家族の一員としての役割があることで自分の存在を肯定することにつながり，家庭科教育のレディネス形成に寄与する．

学童期になると，小学5年生から家庭科教育が始まる．川村美穂は「家庭科が好きな子どもは多く，『役に立つから』と言うのが，その理由のひとつであるが，学んだ時よりもずっと後から役に立ったと言う生徒もあり，未来に役立つことも学ぶ教科である」と述べている[4]．家庭科教育は，前述のレディネス形成によって，学習後も，日常の生活文化として経験することで，時間をかけてゆっくりと，一人一人の生活に根づいていくと考えられる．

(3) 実践の対象となる地域の状況

愛知県知多郡美浜町の人口は，2023年3月末時点で20,980人である．そのうち，本実践活動の対象となる布土地区の人口は，2,365人と，美浜町全体のおよそ1割を占めている．この年の出生数は，美浜町全体で67人，布土地区では，一ケタの9人となっており，筆者が本実践報告の教育ファーム活動を行った2007年の出生数29人から激減している．ただ，布土地区での出生数には，バラつきがあり，前後に生まれた子どもの数

は，20 人前後となっている．日本全体の大きな課題である少子化問題は，美浜町でも長期間に渡り，常に課題となっている．

美浜町内に 5 校ある小学校の中で，1 校を除き 4 校は 1 学年 1 学級で学校運営がなされており，同じ学年の子どもが通う保育所から数えると，9 年間，乳児保育から数えると実に 10 年以上同じ顔ぶれで過ごすことになる．これは，互いを深く理解し合えるという少人数の良さでもあり，多様な人々との関わりができないという地域全体の課題でもあると認識している．

(4) 小規模校での取り組みの特性と協力体制

小規模校には小規模校の，大規模校には大規模校の良さと課題がそれぞれにあることが推察されるが，同じ顔ぶれだからこそ，一致団結する協調性，共に行動，経験を積み重ねることによる，達成感，長く関わるもの同士，相手を思いやる優しさが育まれることができる環境があることが持ち味であると，小規模校の良さを肯定的側面から考える．

その優れた点をより伸ばしていくことが地域の大人の役目であり，そのためには，子ども一人一人にしっかりと目を配り，保育士，教師だけでなく，地域の大人みんなで，地域の子どもを育てる取り組みをしていくことが大切であり，責務である．単学級の良さは，子どもへの保育や教育に地域との連携を相談した時に，快く受け入れて下さる情熱のある保育士，小学校の担任教員の存在により，取り組みに賛同し，協力を得られれば，複数の保育士，複数の担任の意見をまとめ，取り組みの目的や方法の理解，実践に至るまでの日程調節の足並みが揃うのを待つ手間と時間がかからないことがあげられる．もちろん，保育現場の長である，保育園の園長先生，小学校校長，教頭先生との信頼関係を築きながら，保育現場，小学校の教育現場にお邪魔させていただきながら活動していくという謙虚な気持ちと，子どもを託し，共に育てている保護者との良好な関係性の維持を忘れないことが，食育に限らず，地域連携には重要不可欠であると認識するものである．

(5) 活用した事業

実践報告 1 については，農林水産省　平成 20 年度にっぽん食育推進事業「教育ファーム推進事業」を活用した．実践報告 2 については，農林水産省　平成 26 年度消費・安全交付金事業を活用した．

2. 実践報告

(1) 実践報告 1

1) 実践の概要

- 事業名：「大豆を育てた布土保育所青組さんと子ヤギたち」
- 活動期間：2008 年 6 月から 2009 年 2 月（9 か月間）
- 事業回数：10 回
- 対象：美浜町立布土保育所青組（5 歳児）29 名
- ねらい：自分だけの満足や欲求を満たすことではなくて「誰かのために何かをして，それを喜んでくれる気持ちが自分も嬉しい.」と感じられる子どもの心の成長を育む
- 活動内容：5 歳児と子ヤギが一緒に大豆を育てる
- 記録の内容と方法について

以下では，実践者側が，その活動で，子どもたちに育んでもらいたいと考えた事項と，実践者の言葉かけを記している．また，子どもたちと子ヤギの様子を写真で記している．

写真をモノクロにした理由は，写真に色をつけないことで，写真を見る側に，その場面を，できる限りシンプルに想像してもらいたいという意図がある．

- 活動に子ヤギを伴った理由

この事業を進めるにあたり，子どもが畑で大豆を育てて食べるという一連の取り組み時に，常に子ヤギを同行させた．大人ならば，自分が美味しい野菜を食べたいという理由で家庭菜園に精を出すことはできるが，5 歳の子どもたちに畑での活動をさせたいという大人の思惑だけでは，子どもたちにとって，楽しい時間につながりにくい．子ヤギと一緒に大豆畑に通い，苗を植えたり草取りをしたりする中で，子ヤギのしぐさから，他者を愛おしいと感じる心が芽生え，子どもと子ヤギ，そして実践者の間で情緒的な交流ができると考えた．

中尾達馬，勝連綾（2023）[5] は，「動物とのかかわりは，子どもの情緒的発達を促し，自分－友達という二項関係ではなく，動物－自分－友達という形で三項関係が成立することで，子どもたち同士の情緒的交流は促進されていた．また，小学校の理科，生活，特別の教科道徳では，動物の話題は必ず登場する．そのため，幼児期に何らかの形で，動物とのかかわりという原体験・実体験を

積むことは重要なのかもしれない」と述べており，幼児期に五感を使って動物と関わる体験の意義は，のちの小学校教育の内容を，体験を伴ったものとして実感できることであると結論付けている．また，収穫した大豆を調理し，共食する経験は，子どもの心を柔らかく耕し，その後の家庭科教育の学びの土壌作りにつながるものであると推察する．

● 子どもへの言葉かけの意図

活動時には，毎回，子どもへの言葉かけに，注意した．単に「種を蒔きましょう．草を取りましょう」と，作業を伝えるだけでは，大人の言う通りに行動するだけになってしまう．子どもの家庭生活での様々な場面に例えたり，子ヤギへの思いやりの言葉を伝えることで，情緒の豊かさを育むきっかけとした．

以下の各項目の「　」内を子どもへかけた言葉として表記する．

2）実践の具体的な内容

● 第1回目　6月中旬　ちいさな命を愛おしく感じる心を育む（大豆の種まき）

「みんなにも家があるでしょ．大豆にもあるのよ．その中にお布団をしいて寝るよね．大豆にもお布団しいてもらいたいの．掛け布団も欲しいよね．」

この時は，まだ子ヤギは連れて行かず，セルポットに大豆の種まきをした．

● 第2回目　6月下旬　命の誕生の喜びを共有する（大豆の芽出しの時，子ヤギとの出会い）

「みんなも赤ちゃんだった時があるよね．こうやって大事に育ててもらってきたんだね．」

写真1　大豆の苗の前で，子ヤギに草を差し出す子ども

子ヤギに何か食べさせたいという，子どもの心情が命の大切さを育んでいく様子が伺える．

● 第3回目　7月上旬　広い世界へ移動する解放感を味わう（大豆の苗を畑に植え替え）

「大豆の種を蒔いた時，お家に入るんだよって言ったでしょ．でも，もう大きくなってきてお家が狭くなってきたから大豆の苗を大きな畑のお家に持って行きますね．今日はみんなに大豆の引越し屋さんになってもらいます．お願いしますね．子ヤギさんたちは，畑の草を食べる係りです．一緒に働いてくれるので，よろしくお願いします．を言いましょう．」

写真2　子ヤギと一緒に大豆の苗を植える子ども

狭いポットから広い畑に大豆の苗を植え替える日に，自分がシゴトをしているすぐ横に子ヤギがいることで，楽しく心癒されている様子が伺える．

● 第4回目　7月下旬　大切な存在のために働く心をもつ（大豆の成長点の摘心と土寄せ）

「大豆のはっぱの一番上のつぼみを取ってくださいね．せっかく植えたのにかわいそうな気もしますけど，そうじゃないんだよ．みんなも，道が通行止めだったら，回り道するよね．その分いろんなものが見えるし体力もつくでしょ．大豆もはっぱをちぎるとその分ほかの道を探してそこに豆がたくさんつくんだよ．子ヤギさん，今日はまだ朝ごはん食べてないの．草を取ったら食べさせてあげてね」

写真 3　子ヤギの先導で，スコップを持った手をあげて歩道を横断する子ども

保育士の指導により，歩道を渡る時は，「みぎ　ひだり　みぎ」をしてから手をあげて横断している．

大豆の生長点を指でちぎり，雑草を取るという単純作業に，意味があることを伝え，目的を持って取り組むことの楽しさを経験した．

● 第 5 回目　変化への感動を感じる心を育む（9 月下旬　大豆の花の観察）

写真 4　直径 1cm の大豆の花

この日は畑に行かず，大豆の花を保育所に持って行き，種だった大豆から，きれいな花が咲くことを伝えた．

● 第 6 回目　10 月上旬　喜びを共に分かち合うことのうれしさを知る（枝豆の収穫）

「みんなが蒔いたひと粒の大豆がこんなにたくさんの実をつけました．大豆のお母さんはいっぱい赤ちゃんを産むんだねえ．今日はこの枝豆をハサミで切ってくださいね．なくなったらまだ，おかわりがたくさんありますからね．」

写真 5　子ヤギと目線を合わせる子ども

保育所で枝豆をハサミで収穫した際，子どもの日常生活で使われる言葉かけをすることにより，作業の流れを想像しやすくした．枝豆を取ったあとの葉っぱは，子ヤギにあげてねと伝えると，子どもたちは，子ヤギに葉っぱをあげたくて，どんどん収穫作業が進んでいった．

● 第 7 回目 11 月中旬　お迎えの嬉しさを共有する（大豆の収穫）

「小さな大豆の苗を畑に引っ越ししましたけど，大きくなってきて，またみんなと一緒に保育園で過ごしたいって大豆さんが言っています．アリさんや猫さんマークの引っ越し車ってあるでしょ．今日はみんなヤギさんマークの引っ越し車になってくださいね．」

写真 6　子どもと子ヤギの隊列が収穫した大豆をリヤカーに乗せて保育所へ運ぶ

子ヤギと一緒の大豆作りに慣れてきた子どもたちは，回数を重ねるごとに「そこにヤギがいる」ことが当然と

感じるようになり，道端の雑草をちぎっては，ヤギに食べさせてやるなど，大人に何も言われなくても，ヤギのことを思う行動が表れてきた．

● 第 8 回目　12 月上旬　命の瞬間を感じ，誰かの役に立ちたい気持ちを持つ（大豆の脱穀）

「今日は 12 月の 10 日です．みんなにもお誕生日あるよね．今日が大豆の誕生日です．ヤギさんはお昼ご飯をまだ食べていません．みんな頑張ってサヤから大豆を出してお腹のすいているヤギさんにあげて下さい．」

写真 7　落ち着いた様子でヤギに大豆のサヤを食べさせる子ども

枝豆の収穫時にも，葉っぱやサヤをヤギにあげると喜ぶことを知っている子どもたちは，大豆の収穫作業と言うよりは，ヤギのおやつを作るためにさやから大豆を外していた．見る間にヤギの前には山のような大豆のサヤがうず高く積まれていき，保育士からは「みんな働き者だね．」と声がかかった．

● 第 9 回目 1 月上旬　待つことを楽しめる心を持つ（大豆の水洗いと試食）

「たくさん大豆とれたね．でも，みんな食べちゃうと今度種で蒔く分がなくなっちゃうでしょ．そしたらもう大豆食べられないよね．」

大豆を食べるためには，一晩水につける必要がある．水につけた大豆は，節分の豆まきや翌年の種には使えないので，子どもに両手で大豆をつかんでもらい，片手は節分用，もうひとつの片手は来年の種用の容器に入れさせた．目先の欲を満たす前に，その先のことを考えることの大切さを伝え，翌日，茹でた大豆を給食と共に食べた．自分たちが食べる前に，子ヤギに大豆を与え，共に働いたヤギを労う姿があった．

写真 8　節分用，来年の種用に両手で大豆をつかむ子ども

● 第 10 回目　2 月 3 日　季節の行事，節分の豆まきと，子ヤギとの別れの日

「みんながヤギさんと一緒に育てた大豆が花を咲かせて実になって，また大豆になりました．一緒にがんばったヤギさんにも，食べさせてあげてくださいね．でも，全部食べたらなくなっちゃうから種の分をよけたよね．ずっとずっと食べたいから，種としてみんなに渡します．みんなももうすぐ 1 年生．これからもみんなで一緒に大きくなって命をつなげていきましょう．」

写真 9　節分のお面をかぶって，ヤギに大豆を食べさせる子ども

この保育所では，季節の行事として，毎年，節分の豆まきが行われている．子どもたちは，自分で作った鬼のお面を頭にかぶり，先生が鬼役となって豆まきが行われた．鬼にぶつけた大豆を拾い，それをヤギに差し出す子どもたちは，同じ大豆が「鬼にぶつけるもの」から「ヤギのおやつ」に見え方が変化している．6 月からの 8 か月間，共に大豆を育ててきたもの同士の収穫祭となり，また，ヤギとの別れの日となった．

● 3 月上旬　アルバム作り

保育所は，保護者にとっての機能として就労支援という側面があるため，保育所での活動に保護者が参加することが出来なかった．しかし，何か協力をしたいという声は常にあったため，別の場所で，この活動の報告書としてのアルバム作りを協力していただいた．アルバムは，子どもへの言葉かけの文字と，子ども一人一人の写真がそれぞれ 10 枚ほど，子どもが保育所で書いたヤギの絵の入った内容で，そこに保護者の自由な飾りとレイアウトが重なり，ひとつとして同じものはないその子だけのオリジナルなものとなるようにした．数か月に渡る，顔なじみのある子どもたちの生き生きとした様子を膨大な写真で初めて見る保護者の方たちからは，感嘆の声が聞かれ，これまでのこの活動に対して感謝と労いの声を寄せていただき，入れ替わり立ち替わり，3 日間に渡っての作業となった．

3）実践報告 1 のまとめ

実践報告 1 は，学習指導要領の家庭科教育における分野目標のひとつ，「家庭生活を大切にする心情を育み，家族や地域の人々との関わりを考え，家族の一員として，生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う」のレディネス形成の内容に該当する．また，子ヤギと一緒に大豆栽培をする部分は，生活科の教育目標「身近な人々，社会及び自然に自ら働きかけ，意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う」のレディネス形成の内容に該当する．幼児期の様々な体験は，学校教育が始まる前に，広い領域での内容を取り込み，楽しく遊びながら無自覚の内に様々な学びの基礎となる要素が網羅されていると言える．この活動の最後の日の翌月 3 月，対象の子どもたちは保育所を卒園し，4 月には全員が同じ小学校へ入学した．小学校卒業までに数人の転入，転出があるものの，1 学年 1 クラスで小学校生活の 6 年間を同じ顔ぶれで共に過ごすことになる．

（2）実践報告 2

1）実践の概要

● 事業名：「しょう油を造った美浜町立布土小学校 6 年生と林先生」
● 活動期間：2014 年 9 月から 2015 年 3 月（7 か月間）
● 回数：5 回
● 対象：美浜町立布土小学校 6 年生　33 人
● 内容：6 年前に育てた大豆の子孫でしょう油を造り，卒業記念にしょう油を絞り，家族に渡す．
● 達成目標：「誰かのために何かをして，それを喜んでくれる気持ちが自分も嬉しい」と感じられる子どもの心の成長と，家族に手作りしょう油を渡し，保護者からありがとうと言われることで，自己有用感を高める．

● 本実践の特徴

本実践は，活動が始まった 9 月から翌年 3 月までの半年間の間，小学校の準備室に置いた「もろみ（しょう油を絞る前のもの）」を，混ぜ続けたことである．登校日には，毎日変わる日直が混ぜる当番として，責任を持って関わり，全員参加の取り組みとなった．

● 対象となる小学校の状況

小学校の授業時間に，児童と一緒に地域活動をするには，担任の先生の理解と承諾が欠かせない．保育所では，決められた行事のある時以外は，比較的自由に時間を作っていただけたため，天候による日時の変更はあったものの，多くの時間を割いていただくことができた．

しかし，小学校では，どのような教育内容にしたり，どれくらいの授業時間にしたりするのかをまとめた教育課程によって時間割が明確に定められている．それぞれの先生方が，地域や学校の特徴を生かしながら授業の内容を創意工夫しているため，そこに地域の活動に協力していただけるかどうかは，保育所よりも格段に多い学校行事の合間を縫ってのこととなる．1 学年が複数クラスある大規模校では，各クラスの担任の意見が揃わなければ実現は容易ではない．

美浜町は，現時点で小学校 5 校，中学校 2 校を，出生数の減少により，2028 年度には全ての小中学校をひとつにした，小中一貫校への統合計画が策定されている．活動場所となる布土小学校も，1984 年に完成した校舎は 1 学年 2 クラスの設計ながら，管見の限り，25 年以上前から，全ての学年が単学級で運営されているため，大規模校と比較すると，地域連携が取り組みやすいと考えられる．

● 本実践の中心的な協力者

本実践の中心的な協力者である林達之先生は，元々社

会科がご専門で，単学級の良さを存分に生かしての様々な教育活動が認められ，2012年には，愛知県教育委員会「教育表彰」を受けられた人物である．布土小学校6年生の担任となった林先生に，これまでの実績と情熱を見込んで，本実践活動の趣旨の説明をすると快諾の返事をいただいた．5歳児の時，子ヤギと一緒に大豆を育てた子どもたちが6年後，今度は，しょう油造り活動を始められることとなった．

2）実践の具体的な内容

● 第1回　6月　もろみを仕込み始める

手作りしょう油は，本来であれば，3月にしょう油麹と塩と水を混ぜて仕込み始めるものである．しかし，それでは年度末からの取り組みとなり，担任の変更が予想されるため，事前に筆者が3月から仕込んでおいたもろみを，小学校へ運び込んだ．途中からではあるが，このもろみを翌年3月に絞って卒業記念のしょう油にすることとした．

この時点で，1週間に2回，もろみを混ぜる作業が必要なため，誰が混ぜるか林先生が聞くと，児童の誰かが「日直が混ぜるのはどうか」との意見が出て，そのまま決まった．児童たちは，保育所で大豆を育てた経験があるため，その子孫の大豆でしょう油を造ることに，何か感じるものがあったかもしれないが，感想文を書いてもらうことをしなかったことが悔やまれる．

● 「林先生の活動日誌」（引用）

月曜日と金曜日の朝，日直が醤油をかき混ぜています．もろみの入った樽は6年生教室の隣にある図工準備室に置き，しょう油蔵となった図工準備室からはしょう油のよい香りが漂ってきます．（中略）桶のふたを取ると，良い香りが広がり，子どもたちは興味津々で周りに集まってきました．顔を近づけてにおいをかいだり，少しずつ，もろみをなめたりしました．（中略）

今後，このもろみをクラス全員で世話をして，しょう油を熟成させ，卒業式前に絞る予定になっています．

● 第2回目　10月　もろみを仕込む

地元の味噌屋さんで麹を製造してもらう都合から，順序が逆になったが，しょう油麹と塩と水を混ぜて，初めからもろみを仕込む活動をした．このもろみは，3月には小学校から引き上げるものとなるが，日ごろ，家庭で使っている発酵調味料であるしょう油がどのようにして作られるのかを知ってもらうためである．

写真10　しょう油麹と塩をすり合わせてもろみを仕込む子どもたち

● 「林先生の活動日誌」（引用）

麹の付いた大豆と小麦を袋から出すと，一気に緑色の粉が煙のように舞い上がりました．子どもたちはびっくりしたようでしたが，森川さんが「これは体にいいものだから吸い込んでも大丈夫だよ」と説明してくださったので，安心して作業を進めることができました．

仕込みは意外に簡単だったのですが，これからの世話が大変だというお話も聞きました．「新しく仕込んだもろみは，まだ1年生．前に持ってきたのは6年生です．手がかかるのはどちら？」と聞かれると，当然のように子どもたちは「1年生」と答えました．（中略）そして，「1年生のもろみは，手がかかるので毎日かき混ぜてください．6年生のもろみは今まで通り週に2日でいいです」と森川さんはお話ししてくれました．子どもたちは1年生と6年生という比喩に納得し，これからは毎日，日直がもろみの世話をしていきます．図工準備室は樽が2つになりました．1年生と6年生のもろみが仲良く並んでいます．

森川さんのお話では「もろみは絞られてしょう油になる日が卒業式」だそうです．6年生のもろみが卒業式を向かえるころ，布土小学校も卒業式になります．担任としては「6年生のもろみは手がかからなくなっているけれど，6年生の児童はけっこう手がかかるぞ」とも思いますが，しょう油と子どもたちのダブル卒業式を楽しみにして，どちらにも手をかけていこうと思っています．

● 第 3 回目 3 月　しょう油しぼり

しょう油を絞るためには，その形から「船」と呼ばれる木製の道具が必要である．大きな船は持っていたが，限られた時間の中での作業には不向きであったため，地元の大工さんに少し小さ目のサイズの船を作ってもらった．同時に，体験用の更に小さい船も使うこととした．この日は，保護者に小学校に来てもらい，これまで自分たちを育ててくれた恩を労う学校行事「感謝の会」と活動をつなげた．しょう油を使った調理をして保護者と昼食を共にすることを同時に行うため，調理用には，すぐに絞れる小サイズの船を使い，卒業記念用には中サイズの船を使うこととした．

表 1　布土小学校の醤油造り　絞りの日程

時間割り	場　所	やること
1	理科室	醤油絞り
2	理科室	醤油絞り
大放課	片付けと移動	
3	家庭科室	調理
4	家庭科室	調理
5	アッセンブリホール	感謝の会

手作りしょう油は，先に手間は掛かるがそのまま放置して発酵する味噌作りとは異なり，最後に多くの手間がかかるものである．しょう油絞りの日は，一日掛かりでの作業となるため，林先生と事前に打ち合わせをし，学級内でも役割分担を決め，お昼に小学校にやって来る保護者への感謝の会に向けて調理もするというハードスケジュールとなった．

写真 11　全体重をかけて，しょう油を絞る

〈感謝の会のメニュー〉

●しょう油を使った炊き込みご飯

●しょう油を使ったかき玉汁

●しょう油と鰹節をかけた冷や奴

布土保育所でアルバム作りの協力をしてくださった時と同じ保護者の皆さんは，子どもたちが造ったしょう油で調理されたおひるご飯を，子どもたちの卒業式間近かということもあり，感慨深げに食べてくださり，この実践活動を喜んでいただいた．

● 「林先生の活動日誌」（引用）

3 月 3 日，子どもたちの卒業式より一足早く，6 年生もろみの卒業式を行いました．この日が来るまで日直がかき混ぜ，世話をしてきたもろみをしょう油にする日です．（中略）

校長式辞・来賓祝辞の代わりに，森川さんと船を作ってくれた大工の荒井さんのお話があり，卒業式という名のしょう油絞りが始まりました．布袋にもろみを入れたものを船の中に重ね，上から力一杯押すと，船の先から茶色い液体が流れ出てきます．小さい船は，上に角材を渡し，子ども 8 人がぶら下がって押しました．大きな船はジャッキで圧力をかけて絞りました．子どもたちは我先にと，絞りたてのしょう油をなめていました．

感想を聞くまでもなく，みんなの笑顔を見れば，味の想像はつきます．私もなめてみましたが，塩辛さの中に甘さとうまさがあり，まろやかで深みのある味だと感じました．半年間世話をしてきたもろみは，菌の力と日直の力で立派なしょう油に育ちました．

● 第 4 回目 3 月　しょう油の瓶詰め

しょう油は，絞ってから一晩置いて，オリを沈めてから，上澄みだけを瓶に詰めることで澄んだ美味しいしょう油となる．感謝の会の翌日，児童たちは，大きな寸胴からガラス瓶にしょう油を詰め，それぞれ思い思いの言葉をラベルに書いて，世界にひとつだけのしょう油が完成した．小学校の卒業式を間近に控え，一足先にもろみを卒業したしょう油は，児童の手でそれぞれのご家族に手渡された．

本来の卒業式ならば，家族から「おめでとう」と声を掛けられ「ありがとう」と応じるところを，逆に家族から「ありがとう」と児童に声をかけてもらいたいという思いで始めた 6 年生のしょう油造りは，子どもの自己

肯定感を高めたいというねらいがあり，それを実現したものである．保護者からは，保育所での大豆栽培に始まり，小学校での卒業記念に手作りしょう油を造った我が子の成長と地域連携を喜んでいただいた．家庭科の基礎は本来，各家庭で育まれるものである．児童たちが造ったしょう油は，その後各家庭の台所に置かれ，家族の食事の調味料として使われ，和やかな食卓を囲む一員となっているはずである．

写真 12　思い思いの言葉を書いたしょう油のラベル

しょう油を絞っておしまいではなく，卒業して終わりでもなく，長い人生，経験したこと全てがその人の人格をつくる素材となる．いろいろな方法や手段で質の良い食を選択することの意味は，そこにあるのではないかと考察する．

● 「林先生の活動日誌」（引用）
もろみの卒業式から 2 週間後の 3 月 20 日，子どもたちの卒業式が体育館で行われました．しょう油は完成しましたが，子どもたちはまだまだ発展途上です．これから，もっともっと育っていくことでしょう．クラスの子たちが，まろやかで深みのある大人になってくれることを祈っています．

3）実践報告 2 のまとめ

実践報告 2 は，子どもの自己有用感を育む経験が一過性で終わるものにならず，時に幼児期のことを思い出しながら，じわじわと継続することで，心に定着し，生涯に渡って良い影響を受けることを切に願うものである．5 歳児の頃は，与えられた言葉を元に自分の存在価値に気づき，楽しみながら様々なことをする喜びを感じていたものが，学童期となり，役割分担することで，全体的がうまくいく達成感や自己有用感を経験するものとした．

3. 全体のまとめ

古荘純一（2020）は「5 歳ごろまでにほどよいインプットがあり，感情表現が許されていた子どもの自己肯定感は高いと言える．しかし，心理学では『10 歳の壁』と呼ばれる時期から思春期にかけて自己肯定感は下がり続けていくことが，日本人の大きな特徴であり，日本の家庭や学校教育に問題はないかという疑問も生じてくる」[6] と述べている．

本報告は，おおよそ同じ対象児に対して，5 歳児または 6 歳児の年長児時点と，11 歳児または 12 歳児の小学校 6 年生時点に，家庭科教育の基礎となる教育内容，特に食育について指導した実践について記してきた．一般的に，連携という言葉からは，ある活動をする時に，異なる年代，職業，役割を担う人たちが協力しながら，ひとつのことを成しえる場面が想像されるが，本実践報告は，同じ地域で暮らす子どもたちが年齢を重ねていく中で，ひとつひとつのことを丁寧に成しえていく姿を追ったものである．保育所時代の経験は，教科という概念はまだないものの，家庭科教育のレディネス形成となる要素が多くある．

また，家庭科教育は，地域連携しやすい教科であり，それぞれが独立した授業の教科である生活科・総合的な学習の時間，特別な教科である道徳とも密接な関係がある．生活をより良くしようとする気持ち，地域や人々との関わりが大切であることを理解する資質を身に付けるために，様々に関連付けて考えることができる教科である．

更には，人の長い生涯に渡って生きる力を備えていける学習内容が多く，大学入試においては受験に関係ある主要 5 科目以外と位置付けられてはいるものの，その試験問題を解く際には，広い分野から熟慮して文章の読解力の助けとなるなど，かなりの頻度で思考の助けになっているはずである．

4. 本報告の課題

このように様々な意義を持つ家庭科教育，並びに食育

活動であるが，食育基本計画によると，若者の食の乱れが指摘される．高等教育での学び，社会に出て多忙な仕事に日々追われると，食育の理念は後回しになることは致し方のないことと一定の理解をするが，すぐに数字や評価に結びつかないことこそが，家庭科教育や食育の本質であり，また，課題であると言える．

幼児期に動物への優しい気持ちを育みながら大豆を育て，それを発酵，熟成させて美味しいしょう油となる時間の経過を経て，対象となる子どもたちを含む地域の方々，ご家族，友だち，職場，その他関わる全ての方たちが，心豊かな人生を送ることを願い，本実践報告とする．

謝辞

本実践報告をまとめるにあたり，本学教育・心理学部東内瑠里子先生に，多くの時間を割いていただきご指導いただきました．美浜町立布土小学校　林達之先生には，貴重な授業時間を本活動に充てていただき，毎回いただいた丁寧な感想，児童の指導など，多くの協力をいただきました．共に深謝致します．

注

1　食育基本法（2005）農林水産省制定
2　大島順子（1999）「いのち，ひとみ，かがやくフランスの教育ファーム」 リバース
3　宮崎倉太郎（2018）児童心理 172　NO.5　P.453-457「人の役に立つ」等の体験が促す自分の価値の実感」
4　川村美穂（2013）日本家庭科教育学会，「生きる力をそなえた子どもたち―それは家庭教育から」pp44-47
5　中尾達馬，勝連綾（2023）琉球大学教育学部紀要（102）pp63-83，幼稚園での動物飼育体験を通して考える子どもの発達と保育
6　古荘純一（2020）ダイヤモンド社，自己肯定感で子供が伸びる：12 歳までの心と脳の育て方　pp46-48　第 2 章　子どもの脳と「自己肯定感」の関係　自己肯定感が自覚できるのは 5 歳から